

【国際研究集会バージョン】

資料から見るランカイ屋と装飾業の歴史

石川 敦子

1871（明治4）年に日本初の博覧会が開催されて以降、国内で開催された博覧会と名の付くイベントは1,200件を超える。それらの博覧会は、人に焦点をあててみると、主催者・出品者・会場をつくる人・会場を運営する人・観覧者など、多様な人たちで構成されている。

会場づくりに携わった人々を、博覧会の「覧会」と職業をあらわす「屋」を合わせた「ランカイ屋」という造語で呼称することがあるが、彼らは社会の表舞台に出ることはなく一般に知られる存在ではなかった。また、現在では会場づくりの業界でも博覧会を体験したことのない世代が増えている。こうした状況のなか、『万国博覧会と人間の歴史』（思文閣出版、2015年）掲載の拙論では、博覧会の会場づくりに携わった人という意味で混同されがちなランカイ屋と出品物の陳列装飾を行う装飾業の相違点を確認したうえで、彼らの歴史を探ってみた。

日本初の博覧会は、東京奠都により衰退した京都の活性化を図ろうと京都の豪商3人が会主となって1871（明治4）年秋に西本願寺で開催した京都博覧会であった。京都博覧会が11,211人の入場者を集め、266両の利益を出す成功を納めたとにより、この新しい催しはその後5年間に50回以上も全国各地で開催された。

一方、殖産興業策を目的とした政府主催の内国勧業博覧会は、第1回が1877（明治10）年に上野で開催され、1903（明治36）年の大阪まで5回開催された。大正期に入ると博覧会は地方自治体や新聞社などが主催するようになり、開催地はより一層広がった。昭和期に入ると博覧会ブームはさらに加熱し、1928（昭和3）年には大礼奉祝を冠にした博覧会が全国各地で年間10件以上も開催された。

他方で、日本での万国博覧会の開催は、わが国にとって国力を世界に示す格好の事業として、1890（明治23）年、1912（明治45）年、1940（昭和15）年と3度も計画されながら、いずれも実現することはなく、1970（昭和45）年日本万国博覧会を待つことになる。大阪での開催が決定したのを機に、この万国博覧会を成功させるため、1969（昭和44）年、博覧会の会場づくりに携わる業者19団体・385社が結集して全国的組織「日本ディスプレイ業団体連合会」（NDF）が設立された。

本稿では、先の論集『万国博覧会と人間の歴史』に寄稿した論文の焦点をさらに絞り、「ランカイ屋という言葉と装飾業について」「各時代の博覧会における展示の特徴と

会場づくりに携わった人たち」の2項にまとめた。

対象時期は以下①～③の理由により、1872（明治5）年から1969（昭和44）年までとした。

- ① 装飾業の萌芽は明治期にあった。
- ② 個人名で登場するランカイ屋の活躍が盛んになるのは、戦前・戦中から昭和20年代半ばまでであった。
- ③ 1969（昭和44）年、装飾業の全国的組織の設立により、共同で受注するジョイントベンチャー方式などが生まれ、博覧会の会場づくりの体制が大きく変わった。

1 ランカイ屋という言葉と装飾業について

ランカイ屋という言葉がどのように使われていたのかを知るために辞典類を調べてみると、『広辞苑』および『広辞林』には「ランカイ屋（覧会屋）」は収録されていない。わずかに『日本国語大辞典』第20巻（小学館、1976年）に「らんかい（覧会）」の意味と出典が掲載されているのみである。その出典である『隠語辞典集成 8 隠語構成様式並に其語集』（大空社、1935年）には「らんかい 博覧会のこと。（香具師）」と記載されている。

なお、香具師^{やし}については、『話の大事典』第4巻（萬里閣、1951年）によると「遊芸類似のこゝろを行い、人を集めて商品を売る露天営業者の一つとなった。」とある。『隠語辞典集成 8 隠語構成様式並に其語集』が出版された昭和初期、「らんかい」という言葉は見世物を行いながら商売をする露天商という意味を持っていたようである。

次に、博覧会の会場づくりに関わった業界ではこの言葉はどのように捉えられているのであろうか。『ランカイ屋一代——わが博覧会一〇〇年史』（講談社、1969年）の著者・中川童二は、ランカイ屋を以下の四つのクラスに分けて、明快に分析している。

Aクラスは博覧会を頭でつくり出す連中で、各地の博覧会事務局をわたり歩き内外の事情に精通し、関係方面の打ち合わせ・宣伝をこなし、工事規程に熟知し、工事関係者に顔がきく。

Bクラスは工事担当者で建物を建てる組や会社、館内の飾り付けをやる装飾屋。

CクラスはBクラスで働くデザイナー・背景画家・大工・ペンキ屋・電気屋などの職人衆。

Dクラスはテキ屋と称する連中。インチキな商品を売る連中と博覧会で興業などをする連中。

一方、1917（大正6）年に創業した装飾業界の老舗・中村展設株式会社が出版した『実録博覧會1』（中村展設株式会社、2011年）のなかで、ランカイ屋について創業者・中村伝治が、次のように口述していた事が書かれている。

ランカイ屋は博覧会に付いてまわる香具師や興行師のことを言っていた。私は装飾屋だと自負していました。

つまり、中村はランカイ屋と装飾業者は全く違う人種であり、ランカイ屋という言葉には良いイメージを持っていなかったことが確認できる。

また、『日本装飾屋小史』（創元社、2006年）の著者・清水章は装職業のはじまりについて以下のように語っている。

1890年（明治23）第三回内国勸業博覧会の頃から出品者負担による陳列箱が本格的に登場するが、当初、その内部を飾ったのは手の器用な職人や画塾の学生たちで、そんな中から装飾業が生まれてきたようだ。装飾業のもうひとつの流れとしては明治の中頃から博覧会を盛り上げるため、街の要所に装飾塔を建てた街飾りのグループだ。彼等の本業は街頭宣伝や貸物業だが、博覧会の屋外装飾という関りの中から装飾業が芽を出して現在のディスプレイ業に繋がっているようだ。

他方、昭和初め頃から終戦頃にかけてランカイ屋と呼ばれる人達が最も活躍した。博覧会の専業者であるランカイ屋は主催者と折衝する力や職人を束ねる力に富み、カリスマ性があり、博覧会以外の仕事に手を出さないことを誇りとしていた。そのためか後継者が育ちにくく、一代で消滅する例も少なくなかった。

清水は、博覧会の会場づくりに携わった人たちのうち、装飾業は現在のディスプレイ業に繋がっているが、ランカイ屋は戦前の一時期に活躍し消滅した個人であったという見解を持っていることがわかる。

博覧会研究者の世界では、橋爪紳也がその著書『人生は博覧会——日本ランカイ屋列伝』（晶文社、2001年）で、（1）興行師・イベントプロデューサーの櫛引弓人、（2）興行館「奈良館」プロデューサーの谷井友三郎、（3）仮設建築請負業・建材のレンタル業者であった八日市屋清太郎、（4）破格のパノラマを企画したプランナーの鍛冶藤信を紹介している。橋爪は、博覧会の計画段階から参入するプロデューサーやプランナーをランカイ屋として紹介しており、装飾業に触れていないことから、ランカイ屋と装飾業者を区別していると考えられる。

以上のようなことから、ランカイ屋という言葉は、博覧会のプロデューサー、プランナーなど特定の能力を持つ人達を指す一方で、インチキで怪しい興行師・露天商という性格を含んだ、二面性を持つ言葉として使われていることがわかる。特に装飾業界で

は、ランカイ屋と装飾業とは別の人種という意味を持って使われていたようである。

2 各時代の博覧会における展示の特徴と会場づくりに携わった人たち

本節では、明治期、大正期、昭和期（戦前）、昭和期（戦後）に分けて、各時代の展示の特徴とその会場づくりに関与した人たちを探っていくことにする。

明治期

明治期の展示の特徴を見ていこう。1872（明治5）年第1回京都博覧会では、出品物を展示台に並べただけの露出展示から始まった。5年後、政府主催の第1回内国勸業博覧会では工芸品類は全て展示ケース内に展示されたが、その展示方法は展示ケース内に出品物を納めるだけのものであった。四半世紀後の1903（明治36）年第5回内国勸業博覧会は、出品する府県間の陳列箱の装飾競争が加熱していた一方で、観覧者を喜ばせる工夫に満ちたカナダ館など海外の展示に触れて、多様な陳列装飾の手法を学ぶ機会になったようである。

また、1907（明治40）年東京勸業博覧会では、装飾に長けていた呉服店が客を魅せる手法が博覧会の陳列にも持ち込まれた。明治30年代には座売りから商品陳列方式が主流となっていたのである。出品者側ではなく、観覧者側にも目が向けられ始めていると言える。

明治期の会場づくりに携わった人たち

家具業：第1回京都博覧会や第1回内国勸業博覧会の展示に関わった人たちの記録は確認できていないが、以下の記録からは、早い時期から家具業者が関わっていたようである。『内国勸業博覧会事務報告 第三回二』『内国勸業博覧会事務報告 第四回 完二』によると、1890（明治23）年第3回内国勸業博覧会では、本館・農林館・水産館・機械館に必要な陳列箱の総数は1094個で、うち104個は農務省で持っているが残りの990個と美術館用の107個は新調することになり、広く陳列箱製造者が募集されたが、これに家具業者が対応したようである。1895（明治28）年第4回内国勸業博覧会では、列品館に使用する飾り箱・飾台・板塀・書画掛は競争入札により、東京市平民橋本三右衛門に調製させている。

また、1966（昭和41）年に東京都芝家具商工業協同組合が発行した『芝家具の百年史』には、家具業から博覧会に関わった業者として杉田屋商店が紹介されている。同店に勤めており、のちに小林福三商店店主となる小林福三は、農商務省の用命を受けて1904（明治37）年、セントルイス万国博覧会に出張し、職工15名とともに日本部陳列戸棚全部と装飾品類を現地で製作した。

貸物業：貸物業は1688（貞享5）年に刊行された『日本永代蔵』に登場するように、江戸時代にはすでに存在していた。貸物業の東商会は、明治期の仮設会場での式典に必要な什器や道具を貸し出す貸物業のなかでも、特に大規模なテントを中心に、貸し出しから設営・撤収まで受け持つ商売をしていた。そのためテント屋と呼ばれていたが、やがて明治・大正期にかけて、上野公園一帯で開催される博覧会の陳列装飾、式典会場設営、看板を手掛ける業者の一つとなった。前出の『実録博覧會1』には、明治期の博覧会における東商会の実績として以下が記載されている。

1907（明治40）年東京勸業博覧会 美術館・農業館陳列場

1909（明治42）年第1回発明品博覧会 機械・化学製品

1910（明治43）年第1回貿易品博覧会 繊維

1911（明治44）年第1回納涼博覧会 不詳

百貨店業：高島屋は社史によると、販路拡大のため海外の万博に出品者として参加する一方、1895（明治28）年第4回内国勸業博覧会では出品物の審査員をつとめた。第5回内国勸業博覧会に際しては、石川県以外の府県から県名染抜旗やケース張裂等を、博覧会事務局から大国旗・万国旗や美術館全体の戸棚ケース張プラツシケン張（絹張り）工事、階段全体の倭織床マット製作を受注しており、装飾の材料を納めて施工していたことがわかる。

1907（明治40）年東京勸業博覧会では、井出馬太郎が設計した洋風陳列棚に、白木屋の発田伴作が装飾を行っている。また三越は、1910（明治43）年日英博覧会の日本館に陸軍省が出品する、戦争をテーマとしたジオラマを制作している（『ランカイ屋一代』）。

看板業：前掲の『日本装飾屋小史』によると、商工美術の創業者・長谷川一陽は、神田の看板店で働いていたが、白馬会洋画研究所に入り、本格的に洋画を学んで浅草六区の映画看板の絵師として活躍した人物である。1905（明治38）年に400坪のスタジオを浅草に建て、資本金50万円で商工美術の前身である東京作画協会を設立した。絵看板の傍ら、銀座のウィンドーや博覧会の分野にも進出したようである。商工美術の最も古い博覧会の業績として、東京勸業博覧会の陳列箱を装飾したことが同社の資料に残されている。

街頭宣伝業：廣目屋は、1890（明治23）年、街頭宣伝で創業した会社である。『秋田善蔵懷古録——廣目屋への道』（株式会社広目屋、1971年）によると、その後1895（明治28）年に装飾部門を併設し、日清戦争の凱旋将兵を迎える新橋の凱旋門や各所の歓迎門などの祝祭装飾、商店の前面全部を杉葉で飾る杉葉装飾などを請け負うようになった。1898（明治31）年に東京で举行された東京遷都三十年祭でも装飾一切を請負った。このようなことから、装飾塔などの街飾りから博覧会に参入したと考えられる。

以上のように明治期の会場づくりに関わった人たちとして、家具業、貸物業、百貨店業、看板業、街頭宣伝業が確認できる。しかし、会場づくりを業界として見てみると、本業の傍ら陳列箱の製造や出品物の陳列装飾、会場の装飾門や装飾塔を手掛ける者はいたが、専業とする者はまだなく、その確立に向けて模索が続けられている時期であったようである。

大 正 期

1914（大正3）年東京大正博覧会の事務報告・下巻によると、パノラマ展示・ジオラマ展示に使用される模型の出願者9名が記されており、出品物を並べる展示だけでなく、現物を展示することが難しい出品物や状況を再現するためのパノラマ・ジオラマ展示が登場していることがわかる。また、1926（大正15）年皇孫御誕生記念こども博覧会の会誌には、博覧会事務局が全館の装飾一切を京都高等工藝学校（現・京都工芸繊維大学）建築図案科に委嘱するという画期的な試みがなされ、「全館のおもちゃ化」というプランや館内装飾の省略という新しい工夫がなされたと記載されている。

大正期の展示では、観覧者に配慮した展示空間や、観覧者が楽しめる展示装飾が導入されるようになったと言える。そこには娯楽の発達による観覧者の要求や、新聞社が主催する博覧会のテーマの多様化、商品陳列研究家や大学教授などの関与が影響していたと考えられる。また、電気の応用技術の発達も大きな役割を果たしていた。音響・映像・照明などの現代科学技術を除けば、今日に通じる手法が大正期に登場していたと言えよう。

大正期の会場づくりに携わった人たち

家具業：家具業者としては異例の陳列ケースを専門に扱った湘南木工所は、先の『芝家具の百年史』で「ショーケースの王者」として紹介されている。創業者の加茂増五郎は1896（明治29）年、に洋家具を勉強するため渡米し、1898（明治31）年に帰国した。アメリカで蓄えた資金で陳列ケース専門の湘南木工所を開業したが、ショーケースの研究のため1912（大正元）年に再び渡米した。アメリカでは細い華奢な柱を用い、ガラスに木をもたせるという方法が用いられているのを見た加茂は、帰国後早速その方法を取り入れた新しいショーケースを製作し、1922（大正11）年セントルイス平和博覧会、同年のブラジル独立記念博覧会等に出品している。

一方、国内においては、銀座の天賞堂、服部時計店、御木本真珠店のショーケースを製作していたが、農商務省に出入りしはじめ、それをきっかけとして、銀座の有名な店や横浜の商社等からショーケースを受注するようになった。湘南木工所は次第にショーケースの製作所として各方面に認められはじめ、博覧会で使用されるショーケースの製作も引き受けるようになった。

これらのショーケースが会期が終わると取り壊されることに目をつけた加茂は、組み

立て式のショーケースを考案し、主催者や出品者に貸し出した。注文品の製作や貸ケースから生まれる利益は大きく、それらの利益で次々と貸ケースのストックを増やし、その数は2,000コマに達した。大きい博覧会で1,500コマ、小さい博覧会なら500～600コマが使用されたが、それらの需要はすべて湘南木工所のストックでまかなうことのできる数であり、他の手持ちの少ない業者が割り込むきはまったくなくなってしまった。貸ケースは湘南木工所の独占事業となった。

その後、加茂は貸ケースだけでなく、博覧会の特設館の建築、造作をも手がけるようになったが、1919（大正8）年平和記念家庭博覧会の火事で貸ケースが全焼してしまった。この火事以降、1923（大正12）年関東大震災頃までの湘南木工所の主力は建築に注がれるようになった。

装飾業：1917（大正6）年に東商会で博覧会の装飾・設営担当を任されていた中村伝治は、初の博覧会装飾専門業者となる中村商会（現・中村展設）を創業した。創業後、湯島聖堂での実績が増え、湯島聖堂専属出入業者（指定業者）となり、毎年春と秋に博覧会が開催された上野公園は中村商会の仕事場となった（『実録博覧会1』）。

当時、博覧会の現場には工程を管理するシステムがなく、職人たちが思い思いの段取りで作業をしていたため、開会日に間に合わない展示も多かったようである。さまざまな貸物業者が連携することなく作業する様子に着目した中村伝治は、一括して受注すれば作業が円滑に進むようになるのではないかと考えた。注文をする側も、作業をする側も仕事がしやすくなるという斬新な発想であった。

二代目社長の中村良司は『実録博覧会1』に次のように記している。

創業時、専業者としては中村商会がパイオニアです。兼業の業者は建築、看板、百貨店催事、天幕、貸物などを営むかたわら、博覧会に来ていました。

興行師：興行館（特設館）の出展から博覧会に参入したのが、1892（明治25）年に芝居小屋の大道具方として創業した乃村工藝社である。同社が博覧会資料に初めて登場するのは1914（大正3）年東京大正博覧会で、同博覧会の事務報告・下巻に、興行物「生人形館」の申請者として創業者・乃村熊三郎（創業者乃村泰資の幼名）の名前を確認することができる。

大正期の会場づくりを担う人びとはその多くが兼業であったが、陳列ケースを専門に扱う業者や博覧会専門の装飾業者が出現した。これら専門業者の出現は博覧会開催の増加を示すとともに、あらたに参入する人が増え、業界が確立し始める時期であったことを示している。

昭和期（戦前）

1935（昭和10）年始政四十周年記念台湾博覧会の会誌には、「博覧会の陳列は博物館式や共進会式ではなく、簡明直截な意匠の陳列であること」「状況説明はジオラマではなくパノラマ式展示であること」「従来の習慣であるケースの前面装飾は改めること」などの具体的な産業館陳列装飾方針が示されている。また、1938（昭和13）年国民精神総動員 国防大博覧会の開設誌では、東京高等工藝学校（現・千葉大学工学部）教授・宮下孝雄が展示状況を分析したうえで、これからの装飾業は出品点数が多い事を誇りとせず、職業的装飾と陳列効果が一致することが重要であると説いている。

昭和期（戦前）は、このように博覧会の主催者によって陳列方針が明示されたり、大学教授が関与し研究書が発行されるたりするほど、陳列に関する研究が進んだ時代であった。また陳列方法も、次第にケースに入れないオープンシステムへと変わっていく傾向が見られた。だが、依然として出品物を数多く出品することで満足する出品者側の意識や、古い展示手法も見られ、装飾と陳列効果が一致していない状況がなお残っていたようである。

昭和期（戦前）の会場づくりに携わった人たち

仮設建築請負業：先に登場したショーケースレンタル業・湘南木工所の加茂増五郎は、さらに建築請負の加茂組として、1935（昭和10）年の『始政四十周年記念台湾博覧会誌』、1937（昭和12）年の『名古屋汎太平洋平和博覧会誌』、1938（昭和13）年の『国民精神総動員 国防大博覧会開設誌』にその名を確認できる。が、太平洋戦争が始まると、博覧会は人手と資材不足から開催が減少し、湘南木工所は1942（昭和17）年に解散したのであった。

1914（大正3）年東京大正博覧会で、陳列棚の製作者として登場する八日市屋清太郎は、湘南木工所に替わって陳列箱の製造・貸出を行ったが、昭和期に入ると全国各地に器材の基地をつくり、博覧会のパビリオン用の建材レンタルと仮設建築請負業に主力を移した。

博覧会資料に八日市清太郎の名前が確認できる博覧会は以下のとおりである。

- ・1927（昭和2）年東亜勸業博覧会 蔬菜園藝館、裏門、南門、外柵、演藝館、第一・第二・第三号倉庫の施工。
- ・1928（昭和3）年御大典奉祝名古屋博覧会 広告掲載「博覧会・建築 請負 八日市屋清太郎 金沢市高岳町」。
- ・1931（昭和6）年小樽海港博覧会 陳列戸棚と陳列台の貸借契約。
- ・1933（昭和8）年大連市催滿州大博覧会 本館外四ヶ所新築工事の落札、陳列棚及陳列台設置工事の随時契約。
- ・1935（昭和10）年始政四十周年記念台湾博覧会 演藝館の建築並びに付帯工事と

映画館の建築工事。

- ・ 1935（昭和 10）年復興記念横浜大博覧会 演藝館の請負。
- ・ 1936（昭和 11）年富山市主催 日満産業大博覧会 各館陳列戸棚及陳列台間仕切等賃貸。
- ・ 1937（昭和 12）年名古屋汎太平洋平和博覧会 事務局、第一産業本館、第二産業本館、保健衛生館、体育館、教育館、社会館、渡廊下の建築工事と文字取付工事請負。

橋爪紳也は八日市屋清太郎について、「全国に協力してくれる職人が五十から六十名はいて仕事があるたびに現場に集まったようだ」と記しており（『人生は博覧会』）、職人を束ねる力を持っていたらしい。

装飾業：明治期に看板業で創業した商工美術は、1928（昭和 3）年大正記念京都大博覧会で 35 社の陳列箱の装飾を請け負い、常田自転車の展示で最高賞盃を受け、1938（昭和 13）年国防大博覧会では富士フィルムの装飾で特選第一席の金杯を受けた。以降、商工美術は博覧会の展示装飾の本道を歩み、展示技術面で業界の先進的な役割を果たしたようである。

同じく看板店から博覧会に参入した研精社の鍛冶藤信は、看板店で働くうちに軍に入りするようになった。1937（昭和 12）年、佐官待遇の従軍特派員となり、北支の各前線部隊を回って、銃後の意識高揚のための博覧会開催の重要性を説いた人物である。研精社が軍関係の展示を受注した博覧会と展示内容は以下のとおりであった。

- ・ 1935（昭和 10）年始政四十周年記念台湾博覧会 国防館陸軍セクション。
- ・ 1936（昭和 11）年国防と資源大博覧会 戦艦を模倣した海軍館、大パノラマ館、軍艦・潜水艦の野外展示。
- ・ 1936（昭和 11）年富山市主催 日満産業大博覧 国防館。
- ・ 1938（昭和 13）年支那事変 聖戦博覧会 西宮球場のフィールドと野外席全体を使い、戦場を再現した野外大パノラマ。
- ・ 1938（昭和 13）年国民精神総動員 国防大博覧会。
- ・ 1939（昭和 14）年大東亜建設博覧会 武漢三鎮攻略の野外大パノラマ。
- ・ 1940（昭和 15）年航空日本大展観 陸・海・空の野戦大パノラマ。
- ・ 1941（昭和 16）年国防科学大博覧会 100 メートルにおよぶ実物大潜水艦の野外展示、航空館。

鍛冶藤信は野外に戦場を再現する大パノラマのプランを軍に持ち込んだようである。展示館に陳列箱を並べる従来の博覧会のスタイルを放棄し、展示の主体を屋外空間に求

めたところに特色があったということができる。

戦前に創業した展示装飾業のうち、日本造型社は1931（昭和6）年に街頭宣伝業の廣目屋から独立し、逓信省御用達の博展業で創業する。なお博展業とは、年に3～4回の博覧会や展覧会を消化するだけであとの月は楽に暮らすことができた時代に博覧会・展覧会を主体にしていた会社が、自らを呼ぶようになった業界名である。

昭和期（戦前）の会場づくりの業界については、貸物業の合資会社富士屋貸物店（現フジヤ）をはじめ、梅津商会（東京）、名倉商会（名古屋）、林屋装飾店（大阪）、日東建装社（大阪）などの名前が各博覧会誌に確認できるが、貸物業から仮設建築請負業に主力を移す業者が現れる。また、装飾業者が各博覧会の会誌に広告を掲載したり、指定装飾店リストが示されたりするほどの拡がりを見せ、自らを博展業と呼ぶ業界が確立しはじめた。これらの人々のなかに、博覧会の計画段階から参入するプロデューサーやプランナーとしての「ランカイ屋」が確認できる。

昭和期（戦後）

昭和期（戦後）の博覧会の特徴は、戦災で破壊された市街の復興を目的として地方自治体が主催したところにある。当時の通産省は、方針として「興業」には重きを置かず、「商工」と「観光」をテーマにするよう指導した。

展示は土間の三方をベニヤ板で仕切るブース方式が陳列箱に変わって採用されるようになった。極めて乏しい装飾材料から出発したが、やがて科学技術の発展とともにアクリライト、プラスチック、石膏ボード、ガラスファイバー、蛍光塗料などの石油系新素材が加わったことが、表現方法を拡げた。また、アメリカ文化への憧れが高度成長期と重なり、観覧者が求める娯楽性豊かな展示手法が発達していった。

さらに、1954（昭和29）年に開催された第1回日本国際見本市における明確なコンセプトを持った海外各国の機能的な展示は、日本の展示が近代化へ脱皮する大きな契機となった。博覧会の展示も、陳列箱の時代から情報をビジュアルに表現するデザインの時代へと着実に移っていったということができる。

昭和期（戦後）の会場づくりの業界では、野外大パノラマのプランナーとして活躍したランカイ屋の大物・鍛冶藤信も博覧会の仕事から引退する。引退の原因のひとつが、ランカイ屋としての仕事への考え方であったことを示す会話が『70万時間の旅 Ⅲ』（株式会社乃村工藝社、1981年）に記載されているので、以下に紹介する。

鍛冶藤信が55歳、蟻田栄一（のちの乃村工藝社四代目社長）が37歳の1952年（昭和27）に開催された福井復興博覧会の現場で、鍛冶が「博覧会とは観客に興味を沸かせ驚かせることにある。仮にも博覧会を業とする者は、貴社のように菊人形はおろか百貨店の装飾にまで手を拡げるのは邪道だ」という持論を述べたのに対

し、ディスプレイが将来重要なメディアになると予測していた蟻田は「それは古いランカイ屋の考え方で、展示会社の発想ではない」と反論したのであった。

1951（昭和26）年、博覧会・展覧会の業務に永年携わってきた同業17社が業界初の団体として「日本博展施設連盟」を設立した。「日本博展施設連盟」の発足時のメンバーを以下に紹介しておく。

東京 KA 株式会社	木村利三郎
富士宣傳企業株式会社	木村高一郎
日本造型株式会社	島 勇
日本装建株式会社	島田亀太郎
株式会社鈴木商会	鈴木伊吉
巧芸社	玉川祥夫
株式会社中村商会	中村良司
株式会社乃村工藝社	乃村英一
フカキネオン看板株式会社	深木正俊
中央宣傳企劃株式会社	船橋徳太郎
株式会社廣目屋	秋田善之亮
商工美術株式会社	長谷川一郎
日本広研株式会社	長谷川一男
株式会社日本合同宣傳社	花輪 勇
日本工芸株式会社	小川武治
株式会社東京丹青社	渡辺正治
株式会社カブキヤ	高坂公一

1965（昭和40）年5月、日本万国博覧会（大阪万博）の開催が決定した。この決定を受け、1969（昭和44）年、「日本博展施設連盟」を母体とした業界の全国的組織「日本ディスプレイ業団体連合会」（NDF）が設立された。

この万博を契機に、メディアとしてのディスプレイが新しい情報発信の主役になり、総合的な空間演出の指揮者の役割を果たす時代を迎えることとなった。それまで出品物という「モノ」の展示装飾が主であったが、大阪万博では「人類の進歩と調和」を表現するため、展示装飾に「映像展示」「流体制御ロボット技術」「音と光を連動させた自動制御システム」など本格的なエレクトロニクス技術が導入され、「コト」をディスプレイするようになったと考えられる。また、業界ではレベルを世界基準に合わせるために、（1）業種ごとの分散発注による入札方式、（2）プロデューサーシステムの導入、（3）業界間での共同受注（ジョイントベンチャー方式）、（4）海外のディスプレイ企業

との提携、などの新たな試みが行われたのであった。

博覧会の会場づくりの歴史は1970（昭和45）年を転機として、時代が求める高度なニーズに対応できるディスプレイへと脱皮を始め、それに伴い装飾業もディスプレイ業に大きく舵を切って行ったということができる。

おわりに

日本万国博覧会以降、国際博覧会は日本で4回開催された。一方、国内博としては1981（昭和56）年、神戸ポートアイランド博覧会が65億円の黒字を計上する成功を収め、「株式会社神戸市」と言われた。その後、市制100周年を迎える1989年をピークに各地で博覧会が開催されて乱立状態となり、「金太郎飴博」と揶揄されるようになった。通産省は地域が独創的な企画で博覧会を開くことを目的にジャパンエキスポ制度を設け、1992（平成4）年から2001（平成13）年までの10年間に12回開催されたが、1996（平成8）年東京臨海部で計画された世界都市博覧会は中止となった。

当共同研究会の論集『万国博覧会と人間の歴史』発刊にあたって収録した座談会「これまでの万博、これからの万博」（『鴨東通信』99号）で中牧弘允は、「万博の意義を経済的な指標で見いだそうとすると株式会社神戸市に行き着くが、万博はもっと社会的あるいは文化的なものを巨大に蓄えている」と指摘している。インターネットが普及し、手軽にバーチャル体験が可能となった現在、リアル空間を生業とするディスプレイ業界は再び大きな転換期を迎えようとしている。

年表 資料から見る装飾業（ランカイ屋）の歴史

創業年		活動拠点	社名	創業者	博覧会に参入した初期の分野
西暦	和暦				
1805	文化 2	京都	銭屋	銭屋吉兵衛	装飾塔などの街飾り
1888	明治 21	名古屋	愛知看板製作所	棚橋半三郎	
1890	明治 23	東京	廣目屋	秋田柳吉	装飾塔などの街飾り
1892	明治 25	東京	乃村工藝社	乃村泰資	特設館
1898	明治 31	東京	湘南木工所	加茂増五郎	陳列箱製作
1898	明治 31	東京	内外装飾	篠原弥兵衛	装飾塔などの街飾り
1901	明治 34	東京	商工美術	長谷川一陽	陳列箱装飾
1902	明治 35	東京	カブキヤ	高坂公一	装飾塔などの街飾り
1902	明治 35	東京	村山装飾舞台	村山又三郎	装飾塔などの街飾り
1904	明治 37	東京	村田商会		陳列箱製作（セントルイス万博）
1907	明治 40	札幌	六書堂	牧水蘇文	
1907	明治 40	東京	東商会	田中福太郎	陳列箱装飾（東京勸業博覧会）
1914	大正 3	東京	ヒロセ興業社	廣瀬尋常	特設館
1914	大正 3	名古屋	アイチスタジオ	加藤道一	
1914	大正 3	金沢		八日市屋清太郎	陳列箱製作（東京大正博覧会）
1915	大正 4	広島	光工藝社	藤本為吉	陳列箱装飾
1917	大正 6	東京	中村商会	中村伝治	陳列装飾
1917	大正 6	大阪	つむら工藝	津村秀雄	
1919	大正 8	大阪	くろふね工芸社	山口 巖	図案所
1920	大正 9	福岡	右田装飾工務店	右田静茂	陳列箱装飾（福岡工業博覧会誌）
1922	大正 11	大阪	浮田電気営業所	浮田仙太郎	電飾広告板（平和記念東京博覧会誌）
1922	大正 11	大阪	太陽能村テント商会		幕式パビリオン
1923	大正 12	東京	東京 KA 社	木村利三郎	陳列箱装飾
1923	大正 12	大阪	日東建装社	三木覚之助	
1923	大正 12	大阪	千伝社		ブース展示
1924	大正 13	名古屋	カトウスタジオ	加藤専三	
1925	大正 14	大阪	梅木装飾	梅木徳次郎	陳列箱装飾（大連勸業博覧会誌）
1925	大正 14	大阪	帝国装飾社	田中徳太郎	陳列箱装飾（大連勸業博覧会誌）
1925	大正 14	名古屋	名倉屋		陳列箱装飾（大連勸業博覧会誌）
1926	大正 15	大阪	広告研究社	馬淵美郷	陳列箱装飾（皇孫御誕生記念こども博覧会誌）
1926	大正 15	大阪	研進社	松永貞吉	
1926	大正 15	京都	成美社	近藤準一	陳列箱装飾（皇孫御誕生記念こども博覧会誌）
1927	昭和 2	東京	上田工舎		
1928	昭和 3	京都	フジヤ	永田浅三郎	
1928	昭和 3	神戸	三共装飾社	塩見吉三郎	移動展覧会（大日本勸業博覧会）
1928	昭和 3	岡山	チクバ装飾社	竹馬正和	陳列箱装飾
1929	昭和 4	東京	東京装飾社	菅沼四郎	アーチ製作（朝鮮博覧会）
1929	昭和 4	奈良		谷井友三郎	特設館（朝鮮博覧会誌）
1930	昭和 5	福岡	絢爛社	高倉重雄	ブース展示
1931	昭和 6	東京	日本造型社	島 勇	ブース展示
1931	昭和 6	東京	国際装飾社		ブース展示
1933	昭和 8	東京	研精社	小林知治	特設館（婦人こども博覧会誌）
1936	昭和 11	大阪		鍛冶藤信	野外展示（国防と資源大博覧会）
1936	昭和 11	東京	ヤマサキ装飾社	山崎陽一	ブース展示（日満産業博覧会誌）
1936	昭和 11	東京	日本工芸	小川武治	ブース展示
1936	昭和 11	東京	丹青社	伊藤 豊	ブース展示（日満産業博覧会誌）
1937	昭和 12	名古屋	中央工芸	鶴見源重郎	ブース展示（名古屋汎太平洋博覧会誌）
1946	昭和 21	東京	丹青社	渡辺正治	ブース展示
1947	昭和 22	大阪	白水社	水上邦彦	ブース展示

※この年表は『年鑑日本のディスプレイ 1974』に掲載された年表を基に博覧会誌及び関連資料に取り上げられた企業をまとめた。

なお、創業年が特定できない企業については最も古い会誌に掲載された年を創業年とした。